

バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否

一 谷 彊・西 川 満

A Study of Tree-Drawing Patterns in Koch's Baumtest with Special Reference to Junior High School Children Who Have Behavior Disorders of Delinquency or School Refusal

Tsuyoshi ICHITANI and Mitsuru NISHIKAWA

Received April 30, 1983

抄録 中学生の非行児と登校拒否児について、主として intake 段階で、Koch の Baumtest を実施、『バウムテスト整理表』を用いて、両群の樹木描出パターンについて比較検討を加えた。その結果、空間利用の領域、樹木の強調部分、根の様相、幹のあり方、枝の描出、運筆などに、両群の間に有意な差が認められた。性差、予後の改善・不変などの次元を考慮して分析した結果、性差や交互作用効果のみられる項目もあった。結果は、非行児と登校拒否児の内的状態と環境認知のあり方を理解可能ならしめるものであった。このことは、同時に、彼らの指導・助言・カウンセリング・セラピーなどのあり方がいかなうべきかを示唆していた。

索引語 バウムテスト 非行 登校拒否 予後 中学生

Abstract. The purpose of the present study was to compare the junior high school delinquent children's tree-drawing patterns with the school refusal children's, with special reference to Koch's Baumtest. The drawing patterns of each child were scored by using the Baumtest Tabulation Sheet. It was found that there were several important differences in the tree-drawing patterns between the two groups above mentioned. The scoring categories which were found the differences between the two groups were as follows: (i) the areas used to draw a tree, (ii) the parts of a tree which were drawn emphatically, (iii) the drawing patterns of roots, (iv) the expressional patterns of the trunk and the branches, and (v) touch for drawing a tree. When the two factors of sex and prognosis were taken into account in addition to the difference of behavior disorders (delinquency and school refusal), it was found that, in several items of the tabulation sheet, there were main effects of sex factor or prognostic factor, and that there were the interaction effects among the three factors. These results suggested that it was necessary to take into account of these differences of tree-drawing patterns among the subgroups. i.e. the differences of internal psychological states among the subgroups in clinical management of these behavior disordered children.

Key Words. Baumtest, Delinquency, School Refusal, Prognosis, Junior High School Children

I 導 入——問題と目的——

非行や登校拒否については、従来から、真剣に対処されるべき重要な問題になってきているが、ここ数年来、とりわけ中学生の場合には、その指導や相談・助言・援助・介助ならびに処遇などについて、学校や相談機関は苦慮してきているのである。

われわれは、従来から、彼らの内面を理解し、判定・診断する方法として、投影法のひとつである Koch, K. の考案になる Baumtest (Koch, K., 1949; Koch, C., 1952) を使用してきた。そして、種々の臨床群などについて、このテストのもつ臨床的妥当性などについて吟味・検討を加えてきた(林・一谷, 1973; 山下他, 1982; 一谷・山下他, 1983; 一谷・横山, 1979, 1981; 村沢他, 1982; Koch, R., 林・国吉他, 1980)。

ここでは、とりわけ、非行的傾向を持つ中学生と、登校拒否の症状を持つ中学生への今後の指導や相談などへの手掛りを得ることを目的として、彼らに実施した Baumtest を数量的、統計的に処理して検討を加え、非行児と登校拒否児とのあいだには、どのような相違があるのかについて、部分的には、性差をも考慮しつつ、また部分的には予後との関連をも考慮しつつ比較検討を加えることを目的とする。

なお、この目的を吟味するため、ここでは主として、すでに、林・国吉・一谷・津田・斉藤(1980)によって考案された『バウムテスト整理表』を用いて処理した結果に基づいて考察していくことにしたい。

II 方 法

1. 対 象 児：

対象児は、警察からの通告、ないしは、学校や家庭からの通報に基づいて児童相談所に来所し、判定を行なった中学生で、非行児57名と登校拒否児39名とからなっている。

具体的な内訳は表1に示す通りであった。

非行群の行動異常の内容は、バイク窃取や万引きなどの窃盗を主体とするものや、他者(主として教師・友人)への暴力行為のあるもの、そして、シンナー吸引や不純異性交遊などが中心となっている。

また、ここでいう登校拒否とは、主として、神経症的登校拒否や社会性の未成熟などに伴っての登校拒否をさし、非行的傾向の前駆的症状としての登校拒否(つまり怠休・怠学)、精神病の初期的症状としての登校拒否、知的・身体的理由による登校拒否、経済的・家庭的理由による登校拒否などは除外されている。

また、予後については、各症例についてその予後調査期間には相違はあるが、平均的にみて、非行群では3年5か月(範囲=1年1か月~5年4か月)、登校拒否群では3年3か月(範囲=1年1か月~5年11か月)で、両群のあいだに差はない。そして、予後そのものは、児童相談所のケース記録に基づいて判定・評価した。

非行群の予後での「一過性」・「要指導」の判定の基準は次の如くである。すなわち、「一過性」とは、警察通告が1回限りでその後はないこと、または、学校や家庭からの通報や相談依頼がその後には認められないことを意味しており、「要指導」とは、初回の来所(来談)ののち、

表1 対 象 児 の 内 訳

群		非 行 群 (N=57)				登 校 拒 否 群 (N=39)					
事 項											
性 別		男		女		男		女			
人 数		42		15		25		14			
平 均 年 齢		14歳 3 か月				13歳 8 か月					
年 齢 範 囲		12歳 7 か月～15歳 5 か月				12歳 5 か月～15歳 3 か月					
予 後		一過性群		要指導群		登 校 群		断続登校群		不登校群	
性 別		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人 数		23	5	19	10	13	5	8	3	4	5
予後調査期間	平 均	3年 5 か月				3年 3 か月					
	範 囲	1年 1 か月～5年 4 か月				1年 1 か月～5年11か月					

少年院・教護院などに入所していること（または入所したことがあること）、ないしは、保護観察などのようなある一定の指導を受けていること（または受けたことがあること）などを意味している。ふつうにいわれる予後の「改善」と「不変」にそれぞれ対応しているとみてよい。

登校拒否群での予後の「登校」・「断続登校」・「不登校」の判定基準については次のようである。すなわち、「登校」とは、支障なく登校していること、「断続登校」とは断続的に登校していること、「不登校」とは来談して相談・助言・指導を受けているにもかかわらず、いまだに登校できずにいることを指している。

本研究においては、非行群と登校拒否群の描出したバウムテストについての一般的比較を、またとりわけ非行群については、一過性群と要指導群との比較を試みたものを中心に報告する。

2. 手 続 き：

児童相談所で intake した対象児に、バウムテストを実施（K. Koch の指示している教示に忠実に従った）、『バウムテスト整理表』（国吉・林・一谷・津田・斉藤）に基づいて、全体的所見、風景及び付属物、地平、根、幹、枝、冠、果・花・葉、発達遅滞と退行、運筆などの全項目について『バウムテスト整理表—手引—』（林・国吉・一谷・津田・斉藤）に従って忠実にチェックして集計し、統計的検定にかけるという方法をとった。

III 結 果 と 考 察

1. 「非行群 対 登校拒否群」について

(1) 空間利用の領域についての出現率の様相

まず空間利用の領域についてみることにしたい。図1は「空間利用の領域」に関する図示である。1～9のナンバーは、画面内の利用に関して、A～Lの文字は画面からはみ出すように描出した場合に、どこかの領域ではみ出して描出をするかに関して図示したものである。

	L	K	J	
A	1	4	7	I
B	2	5	8	H
C	3	6	9	G
	D	E	F	

図1 「空間利用の領域」に関する図

表2は、非行群と登校拒否群とについて、男女差を考慮に入れて、空間利用の領域がどのようになっているかを図1の様式にしたがって出現頻度と出現率を表示し、2要因（「非行群対登校拒否群」と「男対女」の要因）の分散分析の結果を角変換法によって χ^2 -値で示した（岩原，1977）ものである。

これに基づいて、有意差（ $P < .05$ ）または有意差のある傾向（ $P < .10$ ）を示したもののみにについて、具体的に図示したのが図2（図2-1～図2-7）である。

A要因、つまり「非行群対登校拒否群」の要因について、有意差または、有意な差のある傾向を示す領域は、「領域5」（登校拒否群>非行群：92.3%>87.7%， $P < .10$ ）、「領域6」

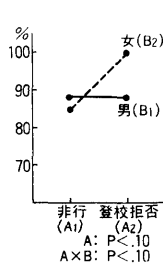


図2-1 「領域5」の利用

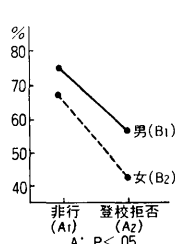


図2-2 「領域6」の利用

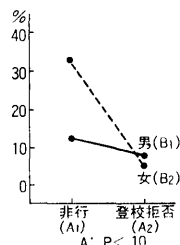


図2-3 「領域8」の利用

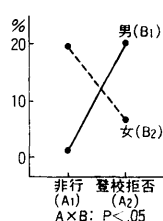


図2-4 「領域A」へのはみ出し

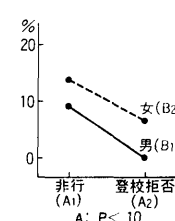


図2-5 「領域G」へのはみ出し

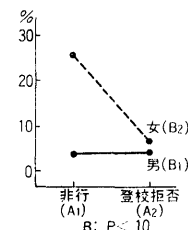


図2-6 「領域H」へのはみ出し

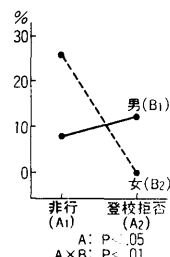


図2-7 「領域J」へのはみ出し

図2 非行群と登校拒否群における「空間利用の領域」の出現率（有意差および有意差傾向のあるもののみ）

表2 非行群と登校拒否群における「空間利用の領域」の出現率

利用領域	群		非行群 (N=57)		登校拒否群 (N=39)		A：非行対登校拒否		B：男 対 女		χ^2 (角変換法による)	
	下位群		男子 (N=42)	女子 (N=15)	男子 (N=25)	女子 (N=14)	非行 (N=57)	登校拒否 (N=39)	男 (N=67)	女 (N=29)	A	A×B
	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	非行対登校拒否	男対女交互作用
画面内の利用	1	6(14.3)	3(20.0)	5(20.0)	5(35.7)	5(35.7)	9(15.8)	10(25.6)	11(16.4)	8(27.6)		
	2	9(21.4)	3(20.0)	5(20.0)	1(7.1)	1(7.1)	12(21.1)	6(15.4)	14(20.9)	4(13.8)		
	3	—	—	—	1(7.1)	1(7.1)	—	1(2.6)	—	1(3.4)		
	4	30(71.4)	10(66.7)	14(56.0)	11(78.6)	11(78.6)	40(70.2)	25(64.1)	44(65.7)	21(72.4)		
	5	37(88.1)	13(86.7)	22(88.0)	14(100.0)	14(100.0)	50(87.7)	36(92.3)	59(88.1)	27(93.1)	2.804†	2.804†
	6	32(76.2)	10(66.7)	14(56.0)	6(42.9)	6(42.9)	42(73.7)	20(51.3)	46(68.7)	16(55.2)	4.038*	
	7	7(16.7)	4(26.7)	4(16.0)	4(28.6)	4(28.6)	11(19.3)	8(20.5)	11(16.4)	8(27.6)		
	8	5(11.9)	5(33.3)	2(8.0)	1(7.1)	1(7.1)	10(17.5)	3(7.7)	7(10.4)	6(20.7)	3.437†	
	9	—	1(6.7)	1(4.0)	1(7.1)	1(7.1)	1(1.8)	2(5.1)	1(1.5)	2(6.9)		
画面外の利用 (はみ出し)	A	1(2.4)	3(20.0)	5(20.0)	1(7.1)	1(7.1)	4(7.0)	6(15.4)	6(9.0)	4(13.8)		4.962*
	B	3(7.1)	3(20.0)	3(12.0)	1(7.1)	1(7.1)	6(10.5)	4(10.3)	6(9.0)	4(13.8)		
	C	3(7.1)	1(6.7)	1(4.0)	1(7.1)	1(7.1)	4(7.0)	2(5.1)	4(6.0)	2(6.9)		
	D	7(16.7)	3(20.0)	6(24.0)	2(14.3)	2(14.3)	10(17.5)	8(20.5)	13(19.4)	5(17.2)		
	E	11(26.2)	5(33.3)	6(24.0)	2(14.3)	2(14.3)	16(28.1)	8(20.5)	17(25.4)	7(24.1)		
	F	4(9.5)	4(26.7)	3(12.0)	1(7.1)	1(7.1)	8(14.0)	4(10.3)	7(10.4)	5(17.2)		
	G	4(9.5)	2(13.3)	—	1(7.1)	1(7.1)	6(10.5)	1(2.6)	4(6.0)	3(10.3)	3.524†	
	H	2(4.8)	4(26.7)	1(4.0)	1(7.1)	1(7.1)	6(10.5)	2(5.1)	3(4.5)	5(17.2)		2.883†
	I	3(7.1)	4(26.7)	2(8.0)	1(7.1)	1(7.1)	7(12.3)	3(7.7)	5(7.5)	5(17.2)		
	J	4(9.5)	4(26.7)	3(12.0)	—	—	8(14.0)	3(7.7)	7(10.4)	4(13.8)	4.955*	6.690**
	K	11(26.2)	4(26.7)	5(20.0)	4(28.6)	4(28.6)	15(26.3)	9(23.1)	16(23.9)	8(27.6)		
	L	6(14.3)	3(20.0)	3(12.0)	2(14.3)	2(14.3)	9(15.8)	5(12.8)	9(13.4)	5(17.2)		

(†P<.10, **P<.05, ***P<.01, ****P<.001)

(†P<.10, *P<.05, **P<.01, ***P<.001)

(非行群>登校拒否群: 73.7%>51.3%, $P<.05$), 「領域8」(非行群>登校拒否群: 17.5%>7.7%, $P<.10$) で、画面内の利用に関しては、総じて、非行群の方が登校拒否群に比して、下の方向にも右の方向にも大きく描出することが示唆されている。いってみれば、基本的、生命的エネルギーが強く、生への対決的な様相を環境に対して示していることがうかがえるのである。これが、いわば、社会化された形で表出されるかどうかが重要な問題なのではないかと考えられるのである。

画面外の利用(はみ出し的描出)についてみると、非行群と登校拒否群とのあいだに、出現率に有意差または有意差のある傾向を示す領域は、「G領域」(非行群>登校拒否群: 10.5%>2.6%, $P<.10$), 「J領域」(非行群>登校拒否群: 14.0%>7.7%, $P<.05$) である。Gの領域は右下のはみ出し、Jの領域は右上のはみ出しを示しており、いずれも出現率は少ないが、非行群の方が登校拒否群より多いことから、画面内の領域の利用とともに、非行群の方が大きく画面を利用すること、つまり、自己拡大(自我肥大)的な傾向を、少なくとも、領域利用からも示していることがうかがえる。

かつ、画面からはみ出しが全体に低い率でありながら、非行群に多いことは、自己の置かれている環境との関係の認知に、登校拒否群とは異なった多少とも逸脱的傾向を示唆する面があるようにも思われるのである。

以上のようなことから、画面の利用(空間の利用)に関してみれば、非行群は総体的に自我肥大的、登校拒否群はこれに比して多少自我収縮的な面を持つことがうかがえるのである。

性差の要因(B要因)についてみると、有意差のみられる傾向のあるものは、「H領域」のみで、女子の方がH領域にはみ出して描出するものが多いことを示している。このことについては十分な考察はやや困難な面もあるが、男子と女子では恐らく非行の内容にもちがいがあることから、そうした面が影響しているのではあるまいかと思われる。

A要因(非行対登校拒否)とB要因(男対女)とのあいだの交互作用効果($A \times B$)に有意差もしくは有意差傾向を示すものは、「領域5」, 「領域A」, 「領域J」の3領域である。

「領域5」にみられる交互作用は、表2と図2-1から明らかなように、登校拒否群の女兒が出現率の高いことによってもたらされているものである。登校拒否の女兒が、全員この領域を利用しているわけだが、他の下位群の男女児に比して、より一層、自我収縮的になりやすい傾向を示しているものと思われる。事実、登校拒否群の女兒の場合は、総じてみると、表2にみられるように、(有意差は認められないが)「領域1」, 「領域4」などの利用率が高く、その他の領域は全体的には利用率が低いことから上述のことは一応妥当なのではなかろうかと思われる。ただ登校拒否群の女兒に限ってこのような事実の出ることについての十分な言及はしがたいところがあることは否定できない。

「領域A」については、その出現率は、登校拒否男≒非行女>登校拒否≒非行男という形で交互作用が認められる。これについての考察は相当にむずかしい面もあるが、登校拒否と非行とのあいだで「領域A」へのはみ出しに、質的に異なった面を示唆しているのではないかと思われる点がある。「領域A」へとはみ出して描写することにより、現在置かれている環境の認知の様式について生への傍観という側面と、過去を明かさないという側面とがあるように思えるからである。前者の考え方は登校拒否に該当し、後者の考え方は非行に当てはまるもののように考えられるがどうであろうか。それが非行の場合は女兒に多く、登校拒否では男児に多い点は、それぞれ

のこれまでの家庭環境や子どもへの親の処遇によるものと思われるが、なお十分なことはいいがたいというのが事実である。

「領域J」へのはみ出し的描出は、男児では非行と登校拒否のあいだに差がなく、女児での非行と登校拒否のあいだの差によってもたらされた交互作用であることがうかがえる。「領域J」は、右上領域へのはみ出しであって、それが女児で顕著に差が出ているということである。つまり、生への対決の領域を示唆する空間であって、女児の非行にそれが多く、女児の登校拒否にはそれが皆無であることによる。女児の非行内容は、不純異性交遊などを含めて、なかなか更生のためのむずかしいものもあり、一旦、違法行為に及ぶと、いわばいきつくところまでいきついたうえでないと再起の困難な側面をもつ性質の非行もなきにしもあらずである。一方、女児の登校拒否においては、性差の特徴もあって、男児に比して、表面的行動はともあれ、感受性の強い面を示唆して少なくなっているともみられるのである。いわば、女児において、性差の特徴がより鮮明に極端に出ているのではないかと考えられるのである。

上記のようなことで、まとめていえば、性差に伴う差や、それを加味した交互作用については率直に言って非常に考察がむずかしい面のあることは否定できない。しかし、非行と登校拒否群の差については、自我の肥大ないし拡大と自我の収縮的傾向というようなもので、概ね理解可能な面があると思われる。バウムテストでの樹木描出が、自己と自己の置かれている環境との間の認知というふうにと考えると、どちらかといえば、非行群では環境からはみ出したいという認知として、登校拒否群では環境になじめない、引っ込みたいとの認知として理解できるのである。

(2) 『バウムテスト整理表』の項目での出現率の様相

非行群と登校拒否群について、次に『バウムテスト整理表』の項目での出現率についてみてみることにしたい。これについて、「A要因」（非行群対登校拒否群）とともに「B要因」（男対女）を考慮に入れてまとめた結果と角変換法によって χ^2 -検定による分散分析をした結果をまとめたものが表3であり、この表3をもとに、有意差または有意差傾向のあるものを図示したのが図3（図3-1～図3-15）である。

まず主効果としてA要因（非行群対登校拒否群）に差の認められるものまたは有意差傾向の認められるものをみると、[全体的所見]の「X, 1, 右強調」である。これには、非行>登校拒否(33.3%>5.1%, $P<.001$)の傾向がみとめられ、右強調の傾向が非行群に多いことを示している。右の領域は、すでに言及したように生への対決の領域であり、外向性の領域とされていることから、非行群が登校拒否群に比してその傾向の強いことがうかがえるのである。

これとは逆に、[全体的所見]の「X, 2, 左強調」は、登校拒否群の方が非行群より有意に多いのである(35.9%>24.6%, $P<.05$)。左強調は、生への傍観、母への領域、内向性を示唆するとされていることから、登校拒否の症状的特徴からみて、この傾向が有意に多くみられることは右強調の場合と逆で、理解可能な面を示唆しており、非行群と登校拒否群とでは環境への対処の仕方、環境認知の様相に違いのあることがうかがえる。非行とか登校拒否の行動異常のゆえにこうした環境認知となるのか、あるいはその逆なのかは明言しがたいが、いずれにしても、相談や治療のあり方について重要な点を暗示していると考えられるのである。

[全体的所見]の「X, 3, 平衡(中央)」は、登校拒否群>非行群(59.0%>42.1%, $P<.05$)となっており、環境に対して平衡状態、いわば身動きならない状態をほのめかしているのは、登校拒否群であることが理解できる。

表3 『バウムテスト整理表』の項目における

項 目	群	非 行 群 (N=57)		登校拒否群 (N=39)	
	下 位 群	男子 (N=42)	女子 (N=15)	男子 (N=25)	女子 (N=14)
	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)
〔全体的所見〕					
IX 4.	強調なし	24(57.1)	8(53.3)	16(64.0)	10(71.4)
X 1.	右強調	11(26.2)	8(53.3)	2(8.0)	—
2.	左強調	14(33.3)	—	12(48.0)	2(14.3)
3.	平 衡 (中央)	17(40.5)	7(46.7)	11(44.0)	12(85.7)
〔幹の基部 (根元)〕					
5.	右ふくらみ	5(11.9)	4(26.7)	9(36.0)	4(28.6)
9.	普 通	16(38.1)	3(20.0)	3(12.0)	3(21.4)
〔根〕					
I 1.	根なし	27(64.3)	11(73.3)	14(56.0)	13(92.9)
3.	二～三本	4(9.5)	2(13.3)	7(28.0)	—
IV 2.	短 (みじかい)	7(16.7)	1(6.7)	—	—
5.	開 (先が開いている)	3(7.1)	2(13.3)	6(24.0)	1(7.1)
〔幹〕					
V 1.	太 (指三本以上)	8(19.0)	3(20.0)	4(16.0)	4(28.6)
2.	細 (指一本以下)	6(14.3)	2(13.3)	10(40.0)	2(14.3)
3.	普 通	28(66.7)	10(66.7)	11(44.0)	8(57.1)
VI 5.	管状幹 (上下開放)	11(26.2)	5(33.3)	6(24.0)	7(50.0)
VII 1.	直 線	9(21.4)	7(46.7)	12(48.0)	8(57.1)
3.	散慢な線	17(40.5)	6(40.0)	6(24.0)	4(28.6)
〔枝〕					
I 1.	枝なし	7(16.7)	5(33.3)	—	4(28.6)
4.	四本以上	22(52.4)	7(46.7)	20(80.0)	6(42.9)
II 3.	二線枝 (分枝なし)	8(19.0)	3(20.0)	5(20.0)	—
5.	混合 (一, 二線枝の)	1(2.4)	—	6(24.0)	1(7.1)
III 1.	全上向枝	26(61.9)	6(40.0)	16(64.0)	8(57.1)
IV 2.	交叉した枝	6(14.3)	1(6.7)	5(20.0)	4(28.6)
VI 6.	尖状枝	13(31.0)	2(13.3)	12(48.0)	1(7.1)
〔果・花・葉〕					
I 1.	果・花・葉なし	17(40.5)	10(66.7)	12(48.0)	4(28.6)
9.	果・花・葉の暗示・あいまい	17(40.5)	3(20.0)	10(40.0)	6(42.9)
〔運 筆〕					
1.	急 速	7(16.7)	6(40.0)	4(16.0)	3(21.4)
2.	遅 緩	—	—	1(4.0)	4(28.4)
3.	弱 圧	16(38.1)	4(26.7)	14(56.0)	5(35.7)
4.	強 圧	13(31.0)	2(13.3)	3(12.0)	1(7.1)
5.	潤 (側)	20(47.6)	7(46.7)	7(28.0)	7(50.0)
6.	渴 (直)	17(40.5)	9(60.0)	18(72.0)	8(57.1)

非行群と登校拒否群の出現率

非 行 対 登 校 拒 否		男 対 女		χ^2 (角変換法による)		
非行 (N=57)	登校拒否 (N=39)	男 (N=67)	女 (N=29)	A 非 行 対 登校拒否	B 男 対 女	A×B 交互作用
f (%)	f (%)	f (%)	f (%)			
32(56.1)	26(66.7)	40(59.7)	18(62.1)			
19(33.3)	2(5.1)	13(19.4)	8(27.6)	22.625***		6.482*
14(24.6)	14(35.9)	26(38.8)	2(6.9)	5.745*	19.491***	
24(42.1)	23(59.0)	28(41.8)	19(65.5)	4.288*	5.264*	3.081†
9(15.8)	13(33.3)	14(20.9)	8(27.6)			
19(33.3)	6(15.4)	19(28.4)	6(20.7)			
38(66.7)	27(69.2)	41(61.2)	24(82.8)		6.101*	
6(10.5)	7(17.9)	11(16.4)	2(6.9)		4.845*	7.629**
8(14.0)	—	7(10.4)	1(3.4)	5.701*	3.864*	3.864*
5(8.8)	7(17.9)	9(13.4)	3(10.3)			
11(19.3)	8(20.5)	12(17.9)	7(24.1)			
8(14.0)	12(30.8)	16(23.9)	4(13.8)			
38(66.7)	19(48.7)	39(58.2)	18(62.1)			
16(28.1)	13(33.3)	17(25.4)	12(41.4)			
16(28.1)	20(51.3)	21(31.3)	15(51.7)	2.987†		
23(40.4)	10(25.6)	23(34.3)	10(34.5)			
12(21.1)	4(10.3)	7(10.4)	9(31.0)	4.421*	11.505***	
29(50.9)	26(66.7)	42(62.7)	13(44.8)		4.047*	
11(19.3)	5(12.8)	13(19.4)	3(10.3)	4.028*	4.028*	4.490*
1(1.8)	7(17.9)	7(10.4)	1(3.4)	7.633**	3.216†	
32(56.1)	24(61.5)	42(62.7)	14(48.3)			
7(12.3)	9(23.1)	11(16.4)	5(17.2)	2.836†		
15(26.3)	13(33.3)	25(37.3)	3(10.3)		10.001**	
27(47.4)	16(41.0)	29(43.3)	14(48.3)			4.298*
20(35.1)	16(41.0)	27(40.3)	9(31.0)			
13(22.8)	7(17.9)	11(16.4)	9(31.0)			
—	5(12.8)	1(1.5)	4(13.8)	11.579***		
20(35.1)	19(48.7)	30(44.8)	9(31.0)			
15(26.3)	4(10.3)	26(38.8)	3(10.3)			
27(47.4)	14(35.9)	27(40.3)	14(48.3)			
26(45.6)	26(66.7)	35(52.2)	17(58.6)			

(† $P < .10$, * $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$)

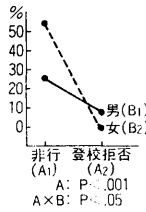


図3-1 〔全体的所見〕「X, 1, 右強調」

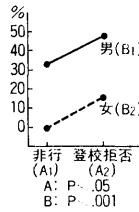


図3-2 〔全体的所見〕「X, 2, 左強調」

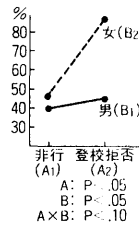


図3-3 〔全体的所見〕「X, 3, 平衡(中央)」

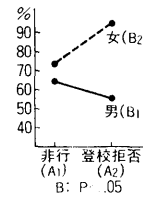


図3-4 〔根〕「I, 1, 根なし」

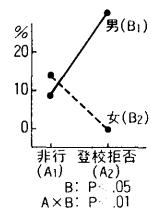


図3-5 〔根〕「I, 3, 二~三本」

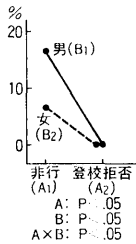


図3-6 〔根〕「IV, 2, 短」

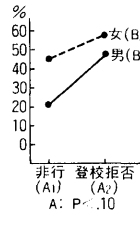


図3-7 〔幹〕「VII, 1, 直線」

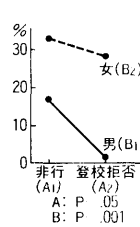


図3-8 〔枝〕「I, 1, 枝なし」

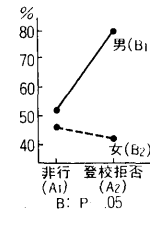


図3-9 〔枝〕「I, 4, 四本以上」

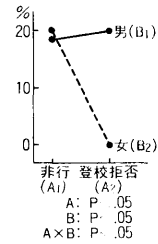


図3-10 〔枝〕「II, 3, 二線枝(分枝なし)」

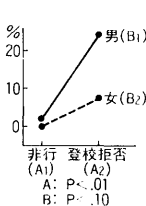


図3-11 〔枝〕「II, 5, 混合(一, 二線枝)」

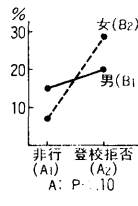


図3-12 〔枝〕「IV, 2, 交又した枝」

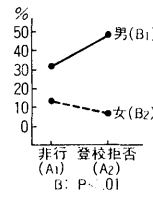


図3-13 〔枝〕「VI, 6, 尖状枝」

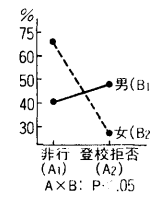


図3-14 〔果・花・葉〕「I, 1, 果・花・葉なし」

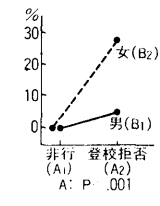


図3-15 〔運筆〕「2, 遅」

図3 非行群と登校拒否群における『バウムテスト整理表』の項目における出現率 (有意差および有意差傾向のあるもののみ)

〔根〕の「IV, 2, 短 (みじかい)」は、両群ともに出現率は低いが、非行群>登校拒否群 (14.0%>0%, $P<.05$) となっている。いわば大地に根をはってみたいといった欲求状態を示すものであるが、これは根の構成全般にわたって見てみないとい何ともいいがたい。根をえがかないことは浮動状態を示唆し、えがいていることは大地にしっかりとつかまっていたいというような精神状態を示唆するものと考え、表裏一体の関係になる。いずれにせよ、短い根を描出することも、この延長として考えると、不安定な精神状態から何らかの形でよりどころを求めている面をほのめかしているものと考えてよいであろう。

〔幹〕の「VII, 1, 直線」については、自己と環境との接点での対応の仕方に、融通がききにくくて、そういう意味での適応性を欠くことを示唆するとともに、ひとつの態度をとりつづけて、

強情なためにぐらつくことがなく、同時に、正しく模範などの意味を持つとされているが、こうした描出の仕方が登校拒否>非行群 (51.3%>28.1%, $P<.10$) となっており、確かに、登校拒否症状を示す児童の方がこの傾向の強いことと対応しているように思われる。

〔枝〕の「I, 1, 枝なし」は、非行群>登校拒否群 (21.1%>10.3%, $P<.05$) の傾向を示している。枝は環境の接点として、葉とともに重要な意味をもつものと考えられる。枝がないことは、こうした点で環境への対処の仕方に不適応が生じやすく、しかも、精神的エネルギーを発散させる仕方により問題が多い面を示唆しているとみられる。その点、非行群の方に、「枝なし」の傾向がより強いことは首肯できる面をもっている。

〔枝〕の「II, 3, 二線枝(分枝なし)」についても、非行群>登校拒否群 (19.3%>12.8%, $P<.05$) と、上と同様の傾向を示しており、概ね上と同様の考察を加えてもよいのではないかと。

〔枝〕の「II, 5, 混合(一, 二線枝)」については、登校拒否群>非行群 (17.9%>1.8%, $P<.01$) となっている。出現率は低いが、環境との関係において、感受性が強い傾向を示唆することから、こうした点が、登校拒否群の方が非行群よりも多いという事実についても、十分に理解可能な面をもっていると考えてよいのではないかと。

〔枝〕の「IV, 2, 交叉した枝」は、登校拒否群>非行群 (23.1%>12.3%, $P<.10$) の傾向を示している。これは、K. Koch. (1952) によると、情動と自己統制とのあいだの葛藤を暗示するものとされている点、こうした内面的葛藤が登校拒否群により一層強いことが、症状の特徴からみても考えられることと対応づけるとそれなりに理解できるのではないかとと思われる。

〔運筆〕の「2, 遅緩」は、出現率は低率ながら、登校拒否群>非行群 (12.8%>0%, $P<.001$) となっている。運筆の遅緩は、渋滞しやすく、硬直しやすく、硬直し弛緩する傾向を帯びやすいものであり、意志の不活発性を示唆するものとされている。この種の描出が登校拒否に多いことは、その行動特徴との関係においてみると、それなりに、対応関係についてもっともな面があるように考えられるのである。

次には「B要因(男対女)」に有意差ないし有意差傾向を示しているものをみてみると、

- ① 〔全体的所見〕 「X, 2, 左強調」 (男>女: 38.8%>6.9%, $P<.001$)
- ② 〔全体的所見〕 「X, 3, 平衡」 (女>男: 65.5%>41.8%, $P<.05$)
- ③ 〔根〕 「I, 1, 根なし」 (女>男: 82.8%>61.2%, $P<.05$)
- ④ 〔根〕 「I, 3, 二～三本」 (男>女: 16.4%>6.9%, $P<.05$)
- ⑤ 〔根〕 「IV, 2, 短(みじかい)」 (男>女: 10.4%>3.4%, $P<.05$)
- ⑥ 〔枝〕 「I, 1, 枝なし」 (女>男: 31.0%>10.4%, $P<.001$)
- ⑦ 〔枝〕 「I, 4, 四本以上」 (男>女: 62.7%>44.8%, $P<.05$)
- ⑧ 〔枝〕 「II, 3, 二線枝(分枝なし)」 (男>女: 19.3%>10.3%, $P<.05$)
- ⑨ 〔枝〕 「II, 5, 混合(一, 二線枝の)」 (男>女: 10.4%>3.4%, $P<.10$)
- ⑩ 〔枝〕 「VI, 6, 尖状枝」 (男>女: 37.3%>10.3%, $P<.01$)

となっている。つまり、男児群では、「左強調」、「根(二～三本)」、「根(短かい)」、「枝(四本以上)」、「二線枝(分枝なし)」、「混合(一, 二線枝の)」ということで、母への領域、過去への執着を示しつつも、環境との対応に気を配っている面がうかがえる。そして、女児群では、「平衡」、「根なし」、「枝なし」の傾向を示すものがみられることから、環境との対応の様式に硬さがか

がえるとともに、内面的には何かに依存すべく浮動状態にあることをうかがわせている点に特徴があるように思える。

ただ、性差的特徴については、その出現率の様相によって如何とも解釈しうる面を内蔵している点は、否定しがたい点であることを率直にことわっておかねばならぬのではないかと考えている。

交互作用効果についてみると次のようになっている。すなわち、「 $A \times B$ 」の交互作用は全般的には、

- ① 〔全体的所見〕 「X, 1, 右強調」: ($P < .05$): 非行女 > 非行男 > 登校拒否男 ÷ 登校拒否女
- ② 〔全体的所見〕 「X, 3, 平衡(中央)」: ($P < .10$): 登校拒否女 > 非行女 ÷ 登校拒否男 ÷ 非行男
- ③ 〔根〕 「I, 3, 二～三本」: ($P < .01$): 登校拒否男 > 非行男 ÷ 非行女 > 登校拒否女
- ④ 〔根〕 「IV, 2, 短」: ($P < .05$): 非行男 > 非行女 > 登校拒否男 ÷ 登校拒否女
- ⑤ 〔枝〕 「II, 3, 二線枝(分枝なし)」: ($P < .05$): 非行男 ÷ 非行女 ÷ 登校拒否男 > 登校拒否女
- ⑥ 〔果・花・葉〕 「I, 1, 果・花・葉なし」: ($P < .05$): 非行女 > 登校拒否男 ÷ 非行男 > 登校拒否女

となっている。

ここで注目しなくてはならないことは、交互作用効果のみられるという事実そのものである。男女の性別によって、非行と登校拒否とのあいだで出現率の異なることを意味していることである。示唆的には、同じ項目についても、バウムテストに限らず、投影法一般が種々の含蓄的意味をもっていることもあるし、また、たとえ同じ心理的意味を持つとしても、とりわけ非行の場合では、男児と女児とのあいだで、非行の種類や形態、メカニズムないし心的過程も異なることが多いものである。登校拒否についても一般的な解釈理論はあるが——たとえば、母子分離不安、性役割不足、自己像などの諸理論のように——、個々の児童によって臨床的に精査すると、その発生機序においてかなりの違いがあることも事実である。こうしたことを考えあわせると、交互作用効果についても、ある種の特定のパターンを示さないところにそれなりの意味をもつものとも考えられる。

いずれにせよ、非行と登校拒否という要因のみでなく、男女という性別の要因をも組み入れて分析すると、もっともっと多面的、多次元的な解釈や考察が必要であることが示唆されており、性別に伴って、同一の行動異常群であっても、採用さるべき解釈仮説が異なるものであるべきことがうかがえるのである。そういう意味でも、今後はさらに性別を考慮に入れての、種々の臨床群での検討が必要のように思われる。こうした点からみて、ここでは暫定的な解釈を施すことについても、目下のところでは差しひかえておきたいと考える。

なお、ここでは有意差のある項目や領域、ないし、有意差的傾向のある項目や領域についてのみ言及しているが、有意差のないものについても、それらが、両群ないしは性別にともなって、あるいは、これら両要因を同時的に考慮した下位群によって、それなりの共通的な性格特徴的パ

ターンや心的過程を保っているものとして考えていかねばならないことは当然であろう。

(3) 非行群と登校拒否群とを性別を組み入れて吟味した場合のまとめ

以上のようなことから、非行群はバウム画を真中に大きく描出し、右方向にはみ出して描くものが多いことが一般的には示唆されている。一方、登校拒否群のバウム画は、相対的には、真中に小さく、宙に浮いたような形の絵で、しかも、どちらかといえば左上方向に描くものが多い傾向にあるといえるだろう。

このことから、非行児は、自我拡張・肥大傾向があり、社会的枠組みにおさまりにくく、環境から逸脱しやすく、現実吟味の能力に乏しい側面を持つものと考えられる。しかし、反面、このことを積極的に意味づけるなら、環境に対して能動的・積極的に立ち向かうとするエネルギーの存在を示唆しているように思われる。他方、登校拒否児は、外界に対して圧力を感じやすく、それに対して萎縮し、回避的で消極的な側面を持つと考えられるが、その反面、内省的で自己へのフィードバック傾向の強い側面を持つことを示しているように思われるのである。

冠部の左右の強調については、非行群が右強調を示し、登校拒否群は左強調の傾向を示している。非行群は、冠部の右側を強調して描くものが多く、一方、登校拒否群は、冠部の左側を強調して描出するものや、左右の強調なく平衡的に描くものが多いことがうかがえるのである。

このことから、非行児は、外界に対して易刺激的、易興奮的で、集中力の乏しさを示しており、登校拒否児は、内向的、主観的であり、用心深く慎重である傾向を示しているといえる。

根については、全体的にみると、登校拒否群の男児に2～3本の根を描くものが多くみられる傾向にある。根の存在は、何らかの安定性や依存性を求めていることと関係していることが示唆されていることから、非社会的な行動様式によってそれを求めていることが考えられる。

幹についてみると、一般的には、登校拒否群が非行群より細く描く点が生徒に示唆されており、普通に描くものは、非行群の方が多い傾向にある。相対的には、登校拒否群が自我が弱いといえる面をほのめかしているのである。

枝については詳細な言及については避けるが、環境と自己との関係において、対応の様式に感受性が登校拒否群によりつよく、敏感であることがうかがえ、非行群では、自我をありのままに acting-out する面がうかがえるのである。

運筆からみると、登校拒否群に、遅緩、弱圧、濁（直）筆がうかがえ、逆に非行群では、強圧、潤（側）筆の傾向がみられることから、情緒の様相が逆の傾向にあることを示唆している。

性差の主効果について、また、交互作用効果については、一応理解可能な側面をうかがわせているが、今回の研究では今後さらに検討を要する面の多いことを示唆するとともに、積極的に、非行群と登校群について、性別によって、内的過程がかなり異なることを示して、一律的、一様な解釈では限界のあることを示唆しているように思われる。

2. 非行群での予後との関係——一過性群（改善群）と要指導群（不変群）との比較——

(1) 空間利用の領域の出現率の様相

先に述べてきた非行群と登校拒否群の場合と同様、非行群についてのみ性別と予後とを考慮に入れて検討した結果について考察することにしたい。具体的には表4と図4（図4-1～図4-10）の通りである。

A要因（一過性群対要指導群）の主効果についてみると、画面内の領域の利用については、有

表4 非行群での予後の「一過性群(改善群)」と「要指導群(不変群)」とにおける「空間利用の領域」の出現率

利用領域	群	一過性群 (N=28)		要指導群 (N=29)		一過性対要指導		男 対 女		χ^2 (角変換法による)		画面内の利用 1 2 3 4 5 6 7 8 9		
		男子 (N=23)		女子 (N=5)		男子 (N=19)		女子 (N=10)		A 一過性対 要指導	B 男 対 女		A×B 交互作用	
		f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)		f (%)			f (%)
画面外の利用	1	3(13.0)	1(20.0)	3(15.8)	2(20.0)	4(14.3)	5(17.2)	6(14.3)	3(20.0)					
	2	6(26.1)	1(20.0)	3(15.8)	2(20.0)	7(25.0)	5(17.2)	9(21.4)	3(20.0)					
	3	—	—	—	—	—	—	—	—					
	4	18(78.3)	3(60.0)	11(57.9)	7(70.0)	21(75.0)	18(62.1)	29(69.0)	10(66.7)					
	5	19(82.6)	4(80.0)	18(94.7)	9(90.0)	23(82.1)	27(93.1)	37(88.1)	13(86.7)					
	6	16(69.6)	4(80.0)	15(78.9)	6(60.0)	20(71.4)	21(72.4)	31(73.8)	10(66.7)					
	7	2(8.7)	2(40.0)	5(26.3)	2(20.0)	4(14.3)	7(24.1)	7(16.7)	4(26.7)					
	8	2(8.7)	2(40.0)	3(15.8)	3(30.0)	4(14.3)	6(20.7)	5(11.9)	5(33.3)		3.131†			
	9	—	—	—	1(10.0)	—	1(3.4)	—	1(6.7)					
画面外の利用 (はみ出し)	A	—	1(20.0)	1(5.3)	2(20.0)	1(3.6)	3(10.3)	1(2.4)	3(20.0)		4.812*	A		
	B	1(4.3)	1(20.0)	2(10.5)	2(20.0)	2(7.1)	4(13.8)	3(7.1)	3(20.0)			B		
	C	1(4.3)	1(20.0)	2(10.5)	—	2(7.1)	2(6.9)	3(7.1)	1(6.7)		3.395†	C		
	D	2(8.7)	3(60.0)	5(26.3)	—	5(17.9)	5(17.2)	7(16.7)	3(20.0)		12.912***	D		
	E	4(17.4)	3(60.0)	7(36.8)	2(20.0)	7(25.0)	9(31.0)	11(26.2)	5(33.3)		4.198*	E		
	F	1(4.3)	3(60.0)	3(15.8)	1(10.0)	4(14.3)	4(13.8)	4(13.8)	4(26.7)		5.862*	F		
	G	2(8.7)	2(40.0)	2(10.5)	—	4(14.3)	2(6.9)	4(13.8)	2(13.3)		5.217*	G		
	H	—	2(40.0)	2(10.5)	2(20.0)	2(7.1)	4(13.8)	2(4.8)	4(26.7)		6.758**	H		
	I	—	3(60.0)	3(15.8)	1(10.0)	3(10.7)	4(13.8)	3(7.1)	4(26.7)		6.403*	I		
	J	2(8.7)	3(60.0)	2(10.5)	1(10.0)	5(17.9)	3(10.3)	4(13.8)	4(26.7)		9.612**	J		
	K	7(30.4)	2(40.0)	5(26.3)	2(20.0)	9(32.1)	7(24.1)	12(28.6)	4(26.7)		3.616†	K		
	L	4(17.4)	2(40.0)	2(10.5)	1(10.0)	6(21.4)	3(10.3)	6(14.3)	3(20.0)			L		

(† P<.10, * P<.05, ** P<.01), *** P<.001)

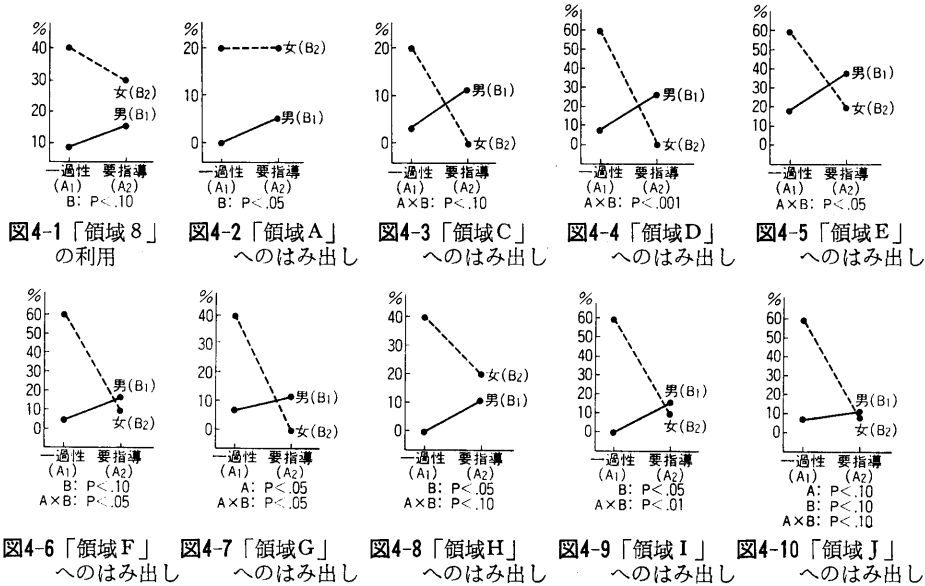


図4 非行群での「一過性群(改善群)」と「要指導群(不変群)」における「空間利用の領域」の出現率(有意差および有意差傾向のまるもののみ)

意差の認められるものはない。画面外へのはみ出しの描出については、「領域G」と「領域J」とである。「領域G」については、一過性群>要指導群(14.3%>6.9%, $P < .05$)となっている。また、「領域J」では、要指導群>一過性群(26.7%>13.8%, $P < .10$)となっている。

「領域G」は右下部分でののはみ出しの描出であって、空間象徴的には、頽廢、敗北、遮蔽、とりわけ、拒否、取り消しを象徴するものとされていること、また、「領域J」は、生への対決、能動性、とりわけ、攻撃、努力、パトスの(主動性)を象徴するものとされていることから、一過性群にG領域へのはみ出しが、要指導群にJ領域へのはみ出しが多いことは首肯できる。ある意味では、内的過程としては同様の過程が作用するとしても、それを露骨に出すか(要指導群: J領域)、拒否的で取り消しの行為に出るか(一過性群: G領域)の相違のように思える。すなわち、非行的行動が一過性には出てもそれを抑制的に遮蔽して社会化された形の行動様式をとるか(一過性群)、社会化されず、依然として反社会的行動様式のままで表出するか(要指導群)の相違が部分的に存在することをほのめかしているように思われる。

非行群のあいだで、男女の性別によって有意差または有意差傾向のみられるものは、

- ① 「領域8」 男<女 (11.9%>33.3%, $P < .10$)
- ② 「領域A」 男<女 (2.4%>20.0%, $P < .05$)
- ③ 「領域F」 男<女 (13.8%>26.7%, $P < .10$)
- ④ 「領域H」 男<女 (4.8%>26.7%, $P < .01$)
- ⑤ 「領域I」 男<女 (7.1%>26.7%, $P < .05$)
- ⑥ 「領域J」 男<女 (13.8%>26.7%, $P < .10$)

となっていて、いずれの領域についても、描出の出現率は男<女という形となっている。しかも

とりわけ、画面からはみ出しの描出が多い（いずれにせよ出現率は低い）のが注目される。今日、中学生の非行問題については、様々な実体が報告されており、その解釈についてもまた多様であるが共通的にいえることは、男子非行が多いなかにも低減しつつある傾向を示すのに対して、女子非行は、低率ななかにも次第に増加傾向にあることが重視されている点と考えあわせると、いわゆる反社会的行動、はみ出しの行為の漸次的増加とこうした空間利用の様相とは関連がなくもないように思われる。また、非行の内容についても、不純異性行遊などというものが女子に含まれており、その点でも女子にのみ特定化される非行のあることから、こうした結果を示すこともあながち理解不可能なわけではないようにみえる。

A要因（一過性対要指導）とB要因（男対女）とのあいだに交互作用効果のみられるものは、

- ① 「領域C」：一過性女>要指導男>一過性男≡要指導女 ($P<.10$)
- ② 「領域D」：一過性女>要指導男>一過性男≡要指導女 ($P<.001$)
- ③ 「領域E」：一過性女>要指導男>要指導女≡一過性男 ($P<.05$)
- ④ 「領域F」：一過性女>要指導男≡要指導女≡一過性男 ($P<.05$)
- ⑤ 「領域G」：一過性女>要指導男≡一過性男≡要指導女 ($P<.05$)
- ⑥ 「領域H」：一過性女>要指導女≡要指導男>一過性男 ($P<.10$)
- ⑦ 「領域I」：一過性女>要指導男≡要指導女≡一過性男 ($P<.01$)
- ⑧ 「領域J」：一過性女>要指導男≡要指導女≡一過性男 ($P<.10$)

となっていて、全体的には、一過性群（改善群）の女兒に出現率の高いことが示されており、次いで要指導群（不変群）の男児となっている。そして、要指導群の女兒と一過性群の男児とが一般的に低い出現率を示している。C、Dは左下領域へのはみ出し、Eは下の領域へのはみ出し、F、Gは右下、Hは右、I、Jは右上へのはみ出しを示していることからみて、空間象徴的には、退縮・後退・幼児期への固着（C、Dの領域）、物質性・下意識・無意識（Eの領域）、拒否・取消し・遮蔽（G、Hの領域）、努力・願望・功撃・能動性・生への対決（I、Jの領域）を示唆していることから、一過性の女兒にこうしたはみ出し描出の多いことは、反社会的行動へのエネルギーを持っているが、それが処遇のあり方いかんによって社会化された形での能動性となり、反社会的行動を拒否し、母親などとの関係改善によってかなり効果をあげうる側面もあることをほのめかしているように思われる。

しかし、一過性群の女兒は、この研究で対象とした人数が他の下位群に比べて少ないこと（ $N=5$ ）から、目下のところでは、明確な解釈をさしひかえた方がよいように思われるのが率直なところである。

(2) 『バウムテスト整理表』の項目での出現率の様相

表5と図5（図5-1～図5-25）を参照されたい。A要因（一過性対要指導）の主効果で有意差のない有意差傾向のあるものをみると、

- ① 「全体的所見」 「IX, 2, 幹強調」：一過性>要指導 ($28.6\%>13.8\%$, $P<.05$)
- ② 「全体的所見」 「X, 1, 右強調」：一過性<要指導 ($21.4\%<48.3\%$, $P<.10$)
- ③ 「根」 「I, 3, 二～三本」：一過性>要指導 ($21.4\%>0\%$, $P<.001$)
- ④ 「根」 「IV, 2, 短」：一過性>要指導 ($21.4\%>6.9\%$, $P<.10$)

- ⑤ 〔幹〕 「Ⅲ, 6, 下」：一過性<要指導 (3.6%<17.2%, $P<.10$)
- ⑥ 〔枝〕 「Ⅰ, 1, 枝なし」：一過性<要指導 (10.7%<31.0%, $P<.01$)
- ⑦ 〔枝〕 「Ⅰ, 4, 四本以上」：一過性>要指導 (60.7%>41.4%, $P<.001$)
- ⑧ 〔冠〕 「Ⅱ, 3, 錯線状冠」：一過性<要指導 (3.6%<27.6%, $P<.05$)
- ⑨ 〔運筆〕 「1, 急速」：一過性<要指導 (7.1%<37.9%, $P<.001$)
- ⑩ 〔運筆〕 「5, 潤(側)」：一過性>要指導 (53.6%>41.4%, $P<.10$)
- ⑪ 〔運筆〕 「10, おざなり」：一過性<要指導 (3.6%<17.2%, $P<.10$)

のようになっている。このような事実から、一過性群では、要指導群に比して、自我強度が高く（幹強調）、より情緒安定的であり（根：二～三本、短）、環境と自己との関係について比較的現実吟味が可能であり（枝：四本以上）、放縦で粗野な面ももちあわせるが生のよろこびを享受しやすく、直観性・感受性に富むこと（運筆：潤）が示唆されているが、他方、要指導群では、一過性群に比して、能動的・積極的・攻撃的（全体所見：右強調）で、環境との関係において適応的な行動様式をとりにくく（枝：枝なし）、情緒的に混乱を生じやすく（冠：錯線状冠）、感情興奮性が高く（運筆：急速）、衝動的・本能的な面がより出やすい（幹：下）傾向を示しているように思われるのである。

次に、B要因（男対女）で主効果のみられるものをみると、

- ① 〔全体的所見〕 「X, 1, 右強調」：男<女 (26.2%<60.0%, $P<.10$)
- ② 〔全体的所見〕 「X, 2, 左強調」：男>女 (33.3%>0%, $P<.001$)
- ③ 〔幹の基部〕 「5, 右ふくらみ」：男<女 (11.9%<26.7%, $P<.10$)
- ④ 〔幹〕 「Ⅰ, 3, 二線幹(断線あり)」：男>女 (38.1%>13.3%, $P<.10$)
- ⑤ 〔幹〕 「Ⅰ, 4, 二線幹(断線なし)」：男<女 (61.9%<86.7%, $P<.10$)
- ⑥ 〔幹〕 「Ⅲ, 5, 下中」：男<女 (45.2%<66.7%, $P<.10$)
- ⑦ 〔幹〕 「Ⅶ, 4, 断線」：男>女 (40.5%<13.3%, $P<.10$)
- ⑧ 〔冠〕 「Ⅰ, 7, 枝葉型冠」：男>女 (42.9%>26.7%, $P<.01$)
- ⑨ 〔冠〕 「Ⅱ, 3, 錯線状冠」：男>女 (19.0%>6.7%, $P<.10$)
- ⑩ 〔発達遅常と退行〕 「15, 明暗」男>女 (19.0%>6.7%, $P<.10$)

となっていることがうかがえる。

男女の人数的分布は、男42名（一過性23名：要指導19名）、女15名（一過性5名：要指導10名）という内訳になっている。こうした比率も無視しえないことでどちらかといえば、この研究で対象とした児童の比率が、男児で一過性が多く、女児ではむしろ要指導の多い状態となっていることから、上に示した結果も、これと対応づけると必ずしも理解不可能ではないように思われる。

第三に、A要因（一過性対要指導）×B要因（男対女）の交互作用効果をみると、

- ① 〔全体的所見〕 「Ⅸ, 1, 冠強調」：要指導女≠一過性男≠要指導男>一過性女 ($P<.05$)
- ② 〔幹の基部(根元)〕 「5, 右ふくらみ」：要指導女>一過性男≠一過性女>要指導男 ($P<.10$)
- ③ 〔幹〕 「Ⅴ, 2, 細」：要指導女≠一過性男>要指導男>一過性女 ($P<.10$)

表5 非行群での予後の「一過性群（改善群）」と「要指導群（不変群）」とにおける『バウムテスト整理表』の項目の出現率

項 目	一過性群 (N=28)		要指導群 (N=29)		一過性対要指導		男 対 女		χ^2 (角変換法による)		
	男 子 (N=23)	女 子 (N=5)	男 子 (N=19)	女 子 (N=10)	一過性 (N=28)	要指導 (N=29)	男 (N=42)	女 (N=15)	A 一過性対 要指導	B 男対女	A×B 交互作用
	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)			
〔全体的所見〕											
IX 1. 冠強調	6(26.1)	—	4(21.1)	3(30.0)	6(21.4)	7(24.1)	10(23.8)	3(20.0)	4.070*	3.396†	4.117*
2. 幹強調	5(21.7)	3(60.0)	3(15.8)	1(10.0)	8(28.6)	4(13.8)	8(19.0)	4(26.7)			
X 1. 右強調	4(17.4)	2(40.0)	7(36.8)	7(70.0)	6(21.4)	14(48.3)	11(26.2)	9(60.0)			
2. 左強調	11(47.8)	—	3(15.8)	—	11(39.3)	3(10.3)	14(33.3)	—			
3. 平衡 (中央)	8(34.8)	3(60.0)	9(47.4)	3(30.0)	11(39.3)	12(41.4)	17(40.5)	6(40.0)			
〔幹の基部 (根元)〕											
5. 右ふくらみ	5(21.7)	1(20.0)	—	3(30.0)	6(21.4)	3(10.3)	5(11.9)	4(26.7)		3.176†	3.614†
9. 普 通	6(26.1)	1(20.0)	10(52.6)	3(30.0)	7(25.0)	13(44.8)	16(38.1)	4(26.7)			
〔根〕											
I 1. 根なし	12(52.2)	3(60.0)	15(78.9)	8(80.0)	15(53.6)	23(79.3)	27(64.3)	11(73.3)	12.580***		
3. 二～三本	4(17.4)	2(40.0)	—	—	6(21.4)	—	4(9.5)	2(13.3)			
II 2. 一線根(断線なし)	6(26.1)	1(20.0)	1(5.3)	1(10.0)	7(25.0)	2(6.9)	7(16.7)	2(13.3)			
IV 2. 短	5(21.7)	1(20.0)	2(10.5)	—	6(21.4)	2(6.9)	7(16.7)	1(6.7)	3.827†		
〔幹〕											
I 3. 二線幹(断線あり)	7(30.4)	1(20.0)	9(47.4)	1(10.0)	8(28.6)	10(34.5)	16(38.1)	2(13.3)	3.445†	2.877†	
4. 二線幹(断線なし)	16(69.4)	4(80.0)	10(52.6)	9(90.0)	20(71.4)	19(65.5)	26(61.9)	13(86.7)			
III 5. 下中	12(52.2)	4(80.0)	7(36.8)	6(60.0)	16(57.1)	13(44.8)	19(45.2)	10(66.7)			
6. 下	1(4.3)	—	4(21.1)	1(10.0)	1(3.6)	5(17.2)	5(11.9)	1(6.7)			
V 1. 太	5(21.7)	2(40.0)	3(15.8)	1(10.0)	7(25.0)	4(13.8)	8(19.0)	3(20.0)			
2. 細	4(17.4)	—	2(10.5)	2(20.0)	4(14.3)	4(13.8)	6(14.3)	2(13.3)			3.224†

VI	5. 管状幹(上下開放)	4(17.4)	1(20.0)	7(36.8)	4(40.0)	5(17.9)	11(37.9)	11(26.2)	5(33.3)	
VII	3. 散慢な線	12(52.2)	2(40.0)	5(26.3)	4(40.0)	14(50.0)	9(31.0)	17(40.5)	6(40.0)	
4.	断線	7(30.4)	1(20.0)	10(52.6)	1(10.0)	8(28.6)	11(37.9)	17(40.5)	2(13.3)	3.756†
〔枝〕										
I	1. 枝なし	3(13.0)	—	4(21.1)	5(50.0)	3(10.7)	9(31.0)	7(16.7)	5(33.3)	4.641*
4.	四本以上	12(52.2)	5(100.0)	10(52.6)	2(20.0)	17(60.7)	12(41.4)	22(52.4)	7(46.7)	12.485***
II	3. 二線枝(分枝なし)	7(30.4)	—	1(5.3)	3(30.0)	7(25.0)	4(13.8)	8(19.0)	3(20.0)	8.693**
4.	二線枝(分枝あり)	11(47.8)	4(80.0)	12(63.2)	2(20.0)	15(53.6)	14(48.3)	23(54.8)	6(40.0)	6.383*
IV	2. 交叉した枝	1(4.3)	1(20.0)	5(26.3)	—	2(7.1)	5(17.2)	6(14.3)	1(6.7)	6.307*
V	7. 冠下枝	—	—	4(21.1)	—	—	4(13.8)	4(9.5)	—	
VI	1. 管状枝(開放形)	15(65.2)	2(40.0)	7(36.8)	3(30.0)	17(60.7)	10(34.5)	22(52.4)	5(33.3)	
6.	尖状枝	8(34.8)	1(20.0)	5(26.3)	1(10.0)	9(32.1)	6(20.7)	13(31.0)	2(13.3)	
〔冠〕										
I	7. 枝葉型冠	8(34.8)	4(80.0)	10(52.6)	—	12(42.9)	10(34.5)	18(42.9)	4(26.7)	8.729** 16.657***
II	3. 錯綜状冠	1(4.3)	—	7(36.8)	1(10.0)	1(3.6)	8(27.6)	8(19.0)	1(6.7)	5.862** 3.009†
〔果・花・葉〕										
I	1. 果・花・葉なし	10(43.5)	2(40.0)	7(36.8)	8(80.0)	12(42.9)	15(51.7)	17(40.5)	10(66.7)	
〔発達遅滞と退行〕										
15.	明暗	6(26.1)	—	2(10.5)	1(10.0)	6(21.4)	3(10.3)	8(19.0)	1(6.7)	2.980† 2.803†
〔運筆〕										
1.	急速	2(8.7)	—	5(26.3)	6(60.0)	2(7.1)	11(37.9)	7(16.7)	6(40.0)	12.912*** 4.151*
3.	弱圧	8(34.8)	3(60.0)	8(42.1)	1(10.0)	11(39.3)	9(31.0)	16(38.1)	4(26.7)	4.008*
4.	強圧	9(39.1)	1(20.0)	4(21.1)	1(10.0)	10(35.7)	5(17.2)	13(31.0)	2(13.3)	
5.	潤(側)	11(47.8)	4(80.0)	9(47.4)	3(30.0)	15(53.6)	12(41.4)	20(47.6)	7(46.7)	2.862† 2.758†
6.	渾(直)	8(34.8)	4(80.0)	9(47.4)	5(50.0)	12(42.9)	14(48.3)	17(40.5)	9(60.0)	
10.	おざなり	1(4.3)	—	4(21.1)	1(10.0)	1(3.6)	5(17.2)	5(11.9)	1(6.7)	3.445†

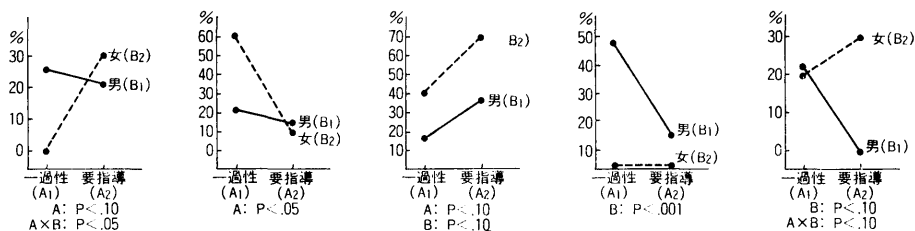


図5-1 [全体的所見] 「IX, 1, 冠強調」 図5-2 [全体的所見] 「IX, 2, 幹強調」 図5-3 [全体的所見] 「X, 1, 右強調」 図5-4 [全体的所見] 「X, 2, 左強調」 図5-5 [幹の基部(根元)] 「5, 右ふくらみ」

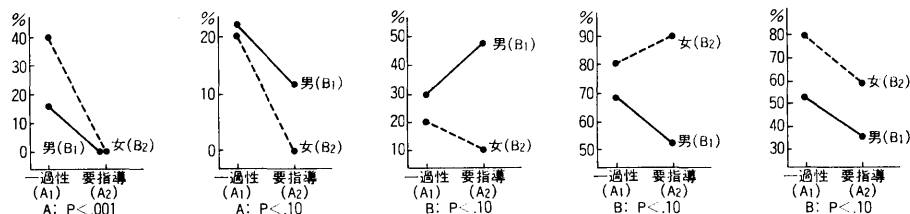


図5-6 [根] 「I, 3, 二〜三本」 図5-7 [根] 「IV, 2, 短」 図5-8 [幹] 「I, 3, 二線幹(断線あり)」 図5-9 [幹] 「I, 4, 二線幹(断線なし)」 図5-10 [Ⅲ, 5, 下中]

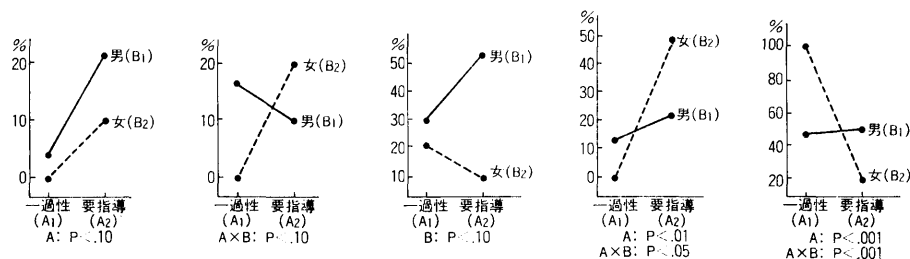


図5-11 [幹] 「Ⅲ, 6, 下」 図5-12 [幹] 「V, 2, 細」 図5-13 [幹] 「Ⅶ, 4, 断線」 図5-14 [枝] 「I, 1, 枝なし」 図5-15 [枝] 「I, 4, 四本以上」

- ④ [枝] 「I, 1, 枝なし」：要指導女>要指導男÷一過性男>一過性女 ($P < .05$)
- ⑤ [枝] 「I, 4, 四本以上」：一過性女>一過性男÷要指導男>要指導女 ($P < .001$)
- ⑥ [枝] 「Ⅱ, 3, 二線枝(分枝なし)」：要指導女÷一過性男>要指導男÷一過性女 ($P < .01$)
- ⑦ [枝] 「Ⅱ, 4, 二線枝(分枝あり)」：一過性女>要指導男>一過性男>要指導女 ($P < .05$)
- ⑧ [枝] 「Ⅳ, 2, 交叉した枝」：要指導性男÷一過性女>一過性男÷要指導女 ($P < .05$)
- ⑨ [冠] 「I, 7, 枝葉型冠」：一過性女>要指導男÷一過性男>要指導女 ($P < .10$)
- ⑩ [発達遅常と退行] 「15, 明暗」：一過性男>要指導女>一過性女 ($P < .10$)
- ⑪ [運筆] 「1, 急速」：要指導女>要指導男>一過性男÷一過性女 ($P < .05$)

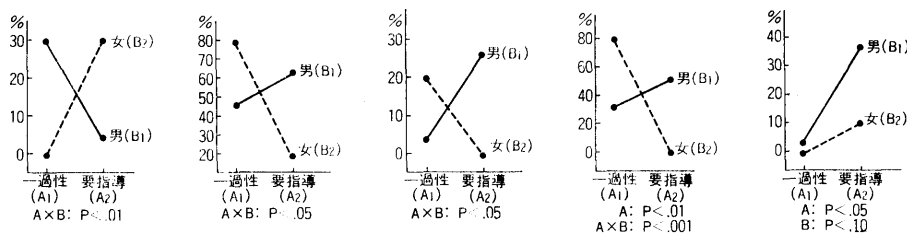


図5-16 [枝]「Ⅱ, 3, 二線枝 (分枝なし)」 図5-17 [幹]「Ⅱ, 4, 二線枝 (分枝あり)」 図5-18 [枝]「Ⅳ, 2, 交叉した枝」 図5-19 [冠]「Ⅰ, 7, 枝葉型冠」 図5-20 [冠]「Ⅱ, 3, 錯線状冠」

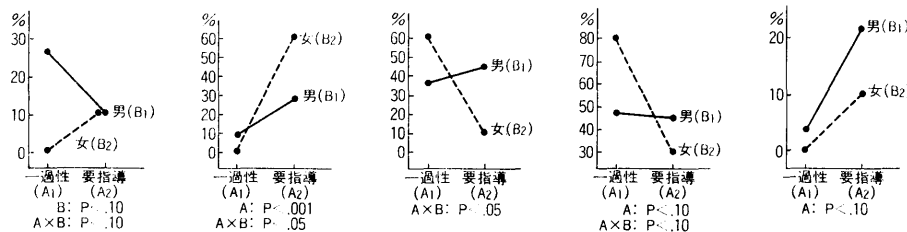


図5-21 [発達遅滞と退行]「15, 明暗」 図5-22 [運筆]「1, 急速」 図5-23 [運筆]「3, 弱圧」 図5-24 [運筆]「5, 潤 (側)」 図5-25 [運筆]「10, おざなり」

図5 非行群での予後の「一過性群 (改善群)」と「要指導群 (不変群)」における『バウムテスト整理表』での項目の出現率 (有意差及び有意差傾向のあるもののみ)

⑫ [運筆]「3, 弱圧」: 一過性女 > 要指導男 > 一過性男 > 要指導女 (P<.05)

⑬ [運筆]「5, 潤 (側)」: 一過性女 > 一過性男 > 要指導男 > 要指導女 (P<.10)

のようになっている。これらについては、Koch の解釈仮説などからみて、一応理解可能な面も多いのであるが、先にも述べたように、とりわけ一過性群の女兒が少ないために十分な言及がしがたい面もあるので、今後の検討にまつことにして、詳細な言及は避けたいと思う。

(3) 非行群で予後 (一過性群と要指導群) と性別を組入れて吟味した場合のまとめ

一過性群と要指導群とを比べてみると、冠について右強調を示すものは、一過性群よりも要指導群に多くこれに対して、左強調を示すものは一過性群の方が多い。このことは、内省的で、用心深く自己をみつめるといった点で相違があり、そのことが予後の様相に何らかの関係があるように思われるのである。

根については、一過性群よりも要指導群に「根なし」のものが多く。一方、2～3本の根の描出しているものは、要指導群では皆無である。根の存在は、すでに言及したように、何らかの安定性や依存性を、根のないことは浮動状態を示唆するものとされていることから、一過性の非行児は、依存性や安定性を求めているといえる。このことは他者への依存性は同時に他者への信頼感に根ざしていると考えられ、そのことが予後の様相に影響するのではないと思われる。要指導群では精神的、内的に浮動状態であることをはのめかしており、より所を求めるのに悩んでいるといえるだろう。

幹の外形線を散漫な線で描くことは、感受性や過敏さと関係することが示唆されていることや、

断線的描写が衝動性や興奮性との関係を含蓄していることを考えると、一過性群と要指導群とで、これらに相違のあることは予後に関係する面が多いように思われる。

枝についてみると、これは、一般に外界に対する態度の表出との関係を示唆されている。そういう点で、この研究においても、比較的多くの項目に、一過性群と要指導群とのあいだに差が認められていることは注目に値するものである。

運筆については、急速な運筆が要指導群の方で一過性より多く、おざりな運筆は逆の傾向にある。これらは、非行児の持つ内的エネルギーをいかに社会化された形で表出するようになるかに関連があり、処遇や治療・相談に対しても示唆を与えるものである。

性差の主効果ならびに、予後と性差の交互作用効果についてはそれぞれに重要な結果が出ているように思われるが、それらの考察については今後の検討にまたねばならない面も多いというのが率直なところである。

IV 結論と要約

非行児と登校拒否児のバウム画に『バウムテスト整理表』を用いて評点化した。

その結果、空間利用の領域、冠部の左右の強調、根の有無、幹の外形線、枝の有無、運筆などの項目は、両群間の差異をみるのにかなり有効であるが、幹の太細については明確なことはいえなかった。

全体をとおして注目されることは、非行児と登校拒否児とでは、外界の認知と、外界への態度の表出に違いがみられるが、それは、非行一過性群が感受性や内向的傾向ないし内面化傾向、ならびに依存性を示しており、しばしば登校拒否群と似かよった傾向を示すことである。このことは、内省力の強さや感受性の有無が、特に非行の予後について、改善（一過性）・不変（要指導）に何らかの形で影響を与えているのではなからうか。

換言すれば、カウンセリングやセラピーに際して、どのように内省力や感受性を培うことが大切であるかを示唆しており、彼らの内的なエネルギーをいかに社会化された形で表出するように指導するかが重要なポイントになるように思われる。

非行児、登校拒否児ともに性差のみられる項目があるとともに、非行一登校拒否と性差のあいだに交互作用効果のみられるものがあることも事実である。これらについては今後もさらに詳細な検討を進めてみたい。この研究では、とりわけ非行群について男女のあいだで非行の内容が異なっていることによるのかもしれないが明確なことは同定しがたい段階であることをことわっておく。

参考文献

- 林 勝造・一谷 彊（編著）1973 バウム・テストの臨床的研究 東京 日本文化科学社。
 林 勝造・国吉政一・一谷 彊・西川 満・津田浩一 1982 バウムテストにみられる非行と登校拒否（Ⅱ）日本教育心理学会第24回総会発表論文集 筑波大学 800-801。
 一谷 彊・山下真理子・津田浩一・林 勝造・国吉政一 1983 不純異性交遊児童の人格像——バウムテストによる検討——京都教育大学紀要 Ser. A, No. 62, 17-39。
 一谷 彊・津田浩一 1982 『バウムテスト整理表』の作成とその具体的利用 京都教育大学紀要 Ser. A, No. 61, 1-22。

- 一谷 彊・横山基弘 1981 高校生のバウムテストにみられる空間利用の領域——生徒理解と指導のための補助手段として——京都教育大学教育研究所報 第27号 313-319.
- 一谷 彊・横山基弘 1979 樹木画の全体印象と高校生の不適応行動との関係——バウムテストを中心に——京都教育大学紀要 Ser. A, No. 55, 1-22.
- 一谷 彊・西川 満・津田浩一・林 勝造 1982 バウムテストにみられる中学生の非行と登校拒否 日本心理学会第46回大会発表論文集 京都大学 p. 345.
- 岩原信九郎 1977 新しい教育・心理統計ノンパラメトリック法 (第8版) 東京 日本文化科学社 (初版1955)
- Koch, C. 1952 The Tree Test: The Tree-Drawing Test as an Aid in Psychodiagnosis. Bern: Hans Huber.
- Koch, K. 1949 Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern: Hans Huber.
- Koch, C. (著) 林 勝造・国吉政一・一谷 彊(訳) 1970 バウム・テスト——樹木画による人格診断法——東京 日本文化科学社.
- Koch, R.・林 勝造・国吉政一・一谷 彊(編著) 1980 バウム・テスト事例解釈法 東京 日本文化科学社.
- 国吉政一・林 勝造・一谷 彊・津田浩一・斎藤通明 1980 バウムテスト整理表及び手引 東京 日本文化科学社.
- 村沢孝子・一谷 彊・西川 満 1982 バウムテストよりみた中学生の登校拒否 関西心理学会第94回大会発表論文集 滋賀大学 p. 24.
- 西川 満 1981 バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否 心理測定ジャーナル Vol. 17, No. 12, 2-6.
- 津田浩一 1980 「バウム・テスト整理表」の紹介〔Ⅰ〕 心理測定ジャーナル Vol. 16, No. 9, 17-22.
- 津田浩一 1980 「バウム・テスト整理表」の紹介〔Ⅱ〕 心理測定ジャーナル Vol. 16, No. 10, 2-8.
- 山下真理子・国吉政一・林 勝造・一谷 彊・津田浩一 1982 性非行児のバウムテストにみられる人格像 日本心理学会第46回大会発表論文集 京都大学 p. 394.